赤ちゃんから幼児期の音楽

中　野　正　以

……はじめに……

畜産関係の技師や研究者によると，「乳牛に音楽を聞かせると乳の出がよくなる」という。

牛は動物であるから耳（聴覚）がある。音楽を聞けば快くなって，乳をよく出すであろうことは，私達にも容易に納得出来る。このように音楽は，動物の牛にさえよい効果を与えるのであるから，人間の乳幼児によい効果をもたらすであろうことは分明の理である。

1，赤ちゃん（乳児）と音楽

赤ちゃんに，美しい音楽を聞かせることは既に，ヨーロッパでは，かなり一般的になっているようであるが，日本では，未だ一部の話題になっているに過ぎない。

「赤ちゃんに名曲を聞かせて何がわかるか？」という考え方の人が多いようであるが，これは甚だ認識不足というべきである。

生まれたばかりの，未だ目も見えない赤ちゃんに，この世で最も早く備わる感覚は聴覚（耳）である。このことは最早，一般的に常識である。

従って，赤ちゃんを音楽的環境に置き，美しい，よい音楽を聞かせることは頗るプラスになる訳である。

日本でも数十年前から，このことを肯定して力説している音響心理学者もいる。

それでは，赤ちゃんに適する，よい音楽とは，具体的にどんな音楽が考えられるか？

それは，赤ちゃん用であるからといって，保育の歌や童謡，唱歌ではなく，少し高級でも，メロディのきれいな，静かで和やかな感じの器楽曲がよいのである。

〔例〕ハイケンスのセレナーデ。愛の喜び（クライスラー）。弦楽セレナーデ～ワルツ（チャイコフスキー）。パデレフスキーのメヌエット。愛の夢（リスト）。アンダンテ・カンタービレ（チャイコフスキー）。天使の夢（ルビンシテイン）etc

2，幼児期の音楽

将来の人間形成を期待するには，赤ちゃんの時期だけで，このことを打ち切ってしまっては，その効果は薄い。

乳児期に培ったこの習慣を，幼児期にも続けるべきである。少なくとも，５才ぐらいまでは続行して欲しい。この方面の識者も，０才から５才までを主張しているようである。

慶大教授の林医学博士―探偵小説家でもある（木々高太郎）―も，「３才を中心に，０才から５才までの間に，高級の音楽に接して置くことは，その人が将来，音楽家になるか否かの問題ではなく，音楽好きになることによって，心の温かい人間になることが出来る。それが人間として，どんなに大切なことか，残念ながら，今の日本では，まだ理解されていない。」と嘆いておられる，という。

幼児期に適する音楽も，当然器楽曲であって，赤ちゃん用のものより規模も大きく，メロディも華麗なもの，更に，リズミックなものを加えていくとよい。

〔例〕ドリゴのセレナーデ。森の水車（アイレンベルク）。エリーゼの為に（ベートーベン）。乙女の祈り（バダジェフスカ）（バダルチェフスカ）。カッコーワルツ（ヨナーソン）。小鳥屋の店（レイク）。ピチカート・ポルカ（シュトラウス）。時の踊り（ボンキエルリ）。ショパンのワルツ。白鳥の湖（チャイコフスキー）。シューベルトのセレナーデ。月の光（ドビュッシー）。スラブ舞曲・第10番（ドボルザーク）etc

……むすびに……

もちろん，才能の如何が大きく関係するが，古今の大音楽家を思い浮かべてみると，その人達の親や近親，周囲に音楽家がいる，所謂“音楽家の家庭”に育った人が多い。

バッハ，ベートーベン，モーツアルト初め，シュトラウス，クララ・シューマン，ウェーバー，プッチーニ，ビゼー，ロッシーニ……など枚挙に遑ない。（もちろん，音楽的環境に乏しい，または，それの全く無い中から出現している大音楽家もいる）。

“Muse の女神は万人の胸に宿る”のである。音楽は音楽家の専用物ではない。人は誰でも音楽を愛し，音楽好きになれるのである。林医博の言を再現してみよう。

「乳幼児期に，よい音楽を聞かせることは，その人が将来，**音楽家になるか否かの問題ではなく**，音楽好きになることによって，**心の温かい人間になることが出来る**。」ということであるが，私も同感である。

両親が，このような認識を以てこどもを育てれば，近時，大きな社会問題となっている，あの恐しい，忌まわしい“金属バット事件”や“祖父刺殺”、“ピアノ殺人，“乳幼児折檻死”などの事件は起こらないで済んだであろう。

なお，本稿では“よい音楽を聞かせること”，すなわち，「音楽鑑賞」を中心に述べてきたが，赤ちゃんは別として，幼児が幼稚園，保育園に行くようになったら，「音楽をすること」（Play）の面も併せて実施して欲しい。

このことは，所謂“お稽古ごと”（ピアノ，ヴァイオリン，オルガン，箏曲，三絃などの器楽や声楽の修得）をさせることではない。

単純，幼稚でもよいから，簡単な楽器や有り合わせのもので，両親とこどもが一緒に合奏し

たり，リズム遊び，うたの唱和をすることである。そして，間にティー・タイムを設けて談笑する。

これが，一家団欒と意志の疎通につながる。斯くすれば，将来“親子の断絶などは起こる筈がないと想う。

〔注〕赤ちゃん（赤ん坊）の語は元来，生後間もない，からだに赤味のあることからの発語であるが，世間一般では乳児と同義に扱っているようである。本稿では，ことばのニュアンスから，乳児に赤ちゃんの語を用いた。